

国木田独歩「忘れえぬ人々」試論

辻 橋 三 郎

(一)

「忘れえぬ人々」(『国民之友』明三四・一)は、発表当時、評家によって喧伝されることはなかった。それもその筈で、独歩自身、一流の文学者として、爆発的な讃辞を蒙り始めたのは、第三小説集『運命』(佐久良書房 明三九・三)が刊行されたところからだったからだ。そしてその時点で、過去の独歩文学が遡及、再評価の脚光をあび始めたのである。「忘れえぬ人々」は、第一小説集『武蔵野』(民友社 明三四・三)に収載されていた。学習研究社版『国木田独歩全集』は、同時代評をも掲載しているが、そのなかで「忘れえぬ人々」をとりあげているのは一文のみである。

「『武蔵野』中で不朽の文と思つたのは巻頭の『武蔵野』及び『郊外』『忘れえぬ人々』であつた。」(石菖洞人¹⁾)
その後、その評価は高くなる一方で、それを決定的にしたのは、吉江喬松氏の論文であった。

「第一期の初まりを劃する『忘れえぬ人々』は、ただにこの初期の彼の作品の態度を示すばかりでなく、彼の全作品を通じての態度を示してゐるものである。」²⁾

絶讃は、次の中村武羅夫文において極まったといつていい。中村は、「忘れえぬ人々」と「牛肉と馬鈴薯」とは、

「世界短篇小説の最高峰を示してゐる」とまで書いてゐる。(4) (もつとも、湯地孝氏のように余り高く買わない人もあった。)

戦後、近代文学研究が、日本文学研究の世界で市民権を獲得するとともに、研究者の増加を迎っている一途のなかで、「忘れえぬ人々」は、遂に、独歩の代表的作品の位置を占めるに至った。その典型的な一例を、吉田精一氏の著書のなかから引用しておく。

「つまりは『詩人』として、『社会感』の破れて『個人感』に生る時に感じる物と事、それがこの有限の人生にあつて『忘れえぬ』意味をもつのである。独歩の小説はいはばすべてこの種の『忘れえぬ』感興にもとづいて書かれたのであり、その意味で、『忘れえぬ人々』は彼のすべてをコンデンスして、その意義を語つている観がある。もし独歩の作品を一作で代表せよというならば、この小説をあげるのが適當であらう。(5)」

このように吉田氏は、この一篇を全独歩文学の凝縮されたものとみているのに対して、今日の文芸評論家中、独歩を最も愛好している中島健蔵氏は、「忘れえぬ人々」は「独歩の人間研究の序章である。」と解説する。筆者も、そうした観点にたつて、以下、筆者なりの分析を試みたい。

(一)

「忘れえぬ人々」という題は、反対概念として「忘れ得る人々」を連想させる。こうしたタイトルの持つ意味の相対性を、独歩は、たしかに意識していた。そのことは、作中、「忘れて叶ふまじき人」が「忘れえぬ人」の全貌の規定としては不十分であるという叙述に窺われるのである。

「親とか子とか、又は朋友知己其ほか自分の世話になつた教師先輩の如きは、つまり単に忘れ得ぬ人とのみはいへ

ない。忘れて叶ふまじき人といはなければならぬ。そこで此処に恩愛の契ちぎもなければ義理もない、ほんの赤の他人であつて、本来をいふと忘れて了しまつたところで人情をも義理をも欠かないで、而も終ついに忘れて了ふことの出来ない人がある。」

つまり、「忘れて叶ふまじき人」とは、「恩愛の契」のある人、「義理のある人」だといふのである。換言すれば、「忘れて叶ふまじき人」とは、常識人からみて、その人を忘却することが許容されない人、すなわち、その人を忘却することは、道義に反すること、人倫に背くこと、礼儀を失することになる人だといふのである。しか、独歩にとつては、この忘却を許容されない人だけでは、「忘れ得る人」の対立概念にはなり得ないといおうとしているのである。そこで、「ほんの赤の他人であつて、本来をいふと忘れて了つたところで人情をも義理をも欠かないで、而も終に忘れて了ふことの出来ない人」といふ、自分なりの「忘れえぬ人々」があることを独歩は補足してみせているのだ。そしてそれが、「一般の者にはさういふ人があるとは言はないが」、「少なくとも僕には有る。恐らく君にも有るだらう。」と書いて、独歩をふくむ少数の者のものだけのものであることが付記されているのである。それなればこそ、結末の一句「『秋山ではなかつた。』」の一句が、不動の重量感をもって、主題を完結させ得たのであつた。その解明が小論の主旨である。

(三)

そこで、作中、独歩の示している、「忘れえぬ人々」の点検を進め、その実態を説明してみよう。ただし、結末において断定される「亀屋の主人あるじ」については、最後にふれることにしたい。

第一にあげられている人物は、主人公、文学青年大津辨二郎が、一九歳の時の経験である。東京の学校を退いて、「瀬戸内通ひの汽船」で帰郷の途中、一孤島に、一人の人影を囑目した時のことである。

「と見るうち退潮の痕の日に輝つてゐる処に一人の人がゐるのが目についた。たしかに男である。又小供でもない。何か頻りに拾つては籠か桶に入れてゐるらしい。二三歩あるいてはしやがみ、そして何か拾つてゐる。自分は此淋しい島かげの小さな磯を漁つてゐる此人をおつと眺めてゐた。船が進むにつれて人影が黒い点のやうになつて了つた、そのうち磯も山も島全体が霞の彼方に消えて了つた。その後今日が日まで殆んど十年の間、僕は何度此島かげの顔も知らない人を憶ひ起したらう。これが僕の『忘れ得ぬ人々』の一人である。」（傍点独歩、傍線辻橋）

これは、周知のごとく、「明治廿四年日記」五月の項の、次のような記事が作品化されたものである。

「此の際余の感情を痛く刺撃したるは、寂寞たる小島の海浜にひとりの人間あり、定めて彼しこの山かげに見る茅屋の主人公なるべし、黙々として何かあさり居たり。余が、眼裏、彼を映じたる一刹那、嗚呼かくしても一生涯は一生涯なりとの感、熱涙と共に突き起る。而も顧みて吾を思ひ、吾及び多くの人々も亦密に考究し来れば、或る無形の「小島に碌々生涯を送る者なる事を感じ、人間は小なる者哉と思ひたり。」（傍線辻橋）

日記中の素材の時点では、辺陲の地において一生を終始する人間の生涯の卑小性、空無性が咏嘆されているのに対して、作品の場合は、無限の空間における人間の微小性、神秘性にアクセントがおかれているように思われる。日記の書かれたのは、明治二四年、数え年二一歳の時であった（以下、年齢は、すべて数え年で記す）。東京専門学校を退学して、両親の住む山口への都落ちの途中ではあつても、なお、青雲の志は彼の心中で疼き続けていた筈である。『欺かざるの記』に、繰返し記されている、独歩のいわゆる「社会感」「社会生存の感」が、若年故の生長期にあつただけに、より強くより活発に働き続けている筈の時代であつた。すなわち、「己を社会の裡に見出す、故に動もすれば齷齪たり、又た遑々たり、而して或は小成皮相の成功に安じ或は空漠たる『アムビション』の楼を築きて以て自

ら焦す事を致す也。」(『欺かざるの記』明二六・七・二八⁽⁸⁾)といった風のものが、「社会感」「社会生存の感」の内容なのである。すなわち、そのとき、独歩の内部では、立身栄達を求める野望が、屈折したかたちでくすぶり燃えていたのである(もつとも、それは、終生、彼の内部で生き続けていたものであったが)。それが、孤島の一人の「碌々生涯を送る者」(傍点辻橋)というやや軽蔑をこめた表現となったのであろうかと思う。「忘れえぬ人々」が発表されたのは明治三十一年、独歩二八歳の時である。すなわち、独歩の内部では、前記した「社会感」「社会生存の感」と「個人感」「天地生存の感」との角逐において、後者が有力になってきていたように思われる時である。「個人感」「天地生存の感」については、独歩自らの言葉で説明させよう。「個人感なるものは天地の間に見出す者なり。然り此の争ふ可からざる、此の永久なる、此の壮嚴不測なる天地の裡に見出す者なり。」(傍点独歩)要するに、無限、永遠の天地の相のもとで人間とその生とを直感、思考することが、「個人感」「天地生存の感」の実体なのであった。しかも、その人間が、名もなく「淳朴の生活」を送っている人である時、「天地生存の感」は、より完璧となる性質のものであった。瀬戸内の孤島の人影は、「個人感」「天地生存の感」を誘発する象徴的存在であったわけである。二番目にあげられている人物は、独歩が、明治二十七年一月一日、阿蘇登山を終えて、山麓までおりて来た時の体験が素材になっている。

「人影が見えたと思ふと、『宮地やよいところじや阿蘇山ふもと』といふ俗語を長く引いて丁度僕等が立てる橋の少し手前まで流して来た其俗語の意と悲壯な声とが甚麼に僕の情を動かしたらう。二十四五かと思はれる屈強な壮漢が手綱を牽いて僕等の方を見向きもしないで通つてゆくのを僕はちつと睥視していた。夕月の光を背にしてゐたら其横顔も明亮とは知れなかったが其逞しげな体軀の黒い輪廓が今も僕の目の底に残つてゐる。」

僕は壮漢の後影をちつと見送つて、そして阿蘇の噴煙を見あげた。『忘れ得ぬ人々』の一人は則ち此壮漢である。」

(傍点辻橋)

この素材は、『欺かざるの記』明治二十七年一月一日の条には、「阿蘇山に上る此日坂梨に宿す」と、いとも簡単に記されているだけである。同年同月二四日の大久保余所五郎宛の書簡の方が、詳細に書きこまれているが、それも山頂のことが写実的に描かれているにとどまる。独歩は、この阿蘇登山の時には、二四歳になっていた。丁度、佐伯在任中で、ワーズワース傾倒がその極に達していたところで、その思想、感情に、ワーズワースの影響が最も大きい時分であった。したがって、独歩が「俗謡」をうたう「牡漢」に、「淳朴」な生活者を、その「牡漢」と雄大な阿蘇山との対比に、「天地生存の感」を激しく触発されたであろうことは想像に難くない。

三人目の人物は、四国の三津ヶ浜で、朝日の輝く雑踏のなかで見出した一人の琵琶僧である。

「僕はちつと此琵琶僧を眺めて、其琵琶の音に耳を傾けた。此道幅の狭い軒端の揃はない、而も忙しさうな巷の光景が此琵琶僧と此琵琶の音に調和しない様で、而も何処どこかに深い約束があるやうに感じられた。あの鳴咽おえつする琵琶の音が巷の軒から軒へと漂ふて勇ましげな売声、かしましい鉄砧かねしほの音と雑ざつて、別に一道の清泉が濁波だくはの間を潜くぐつて流れるやうなのを聞いてみると、嬉しさうな、浮きくした、面白さうな、忙しさうな顔つきをしてゐる巷の人々の心の底の糸が自然の調をかなでてゐるやうに思はれた、『忘れえぬ人々』の一人は則ち琵琶僧である。(傍線辻橋) このエピソードの原経験は、明治二十七年八月のことであろうと、山田博光氏は推定している。⁽⁶⁾

「三日の午前十一時三津ヶ浜を出発して午前四時広島に着し直に乗りかへて九時帰国す。」(『欺かざるの記』明治二十七年八月五日の項)。

この琵琶僧は、放浪の人ではあるが、「淳朴」な人物と独歩にはうけとられたのであろう。巷の不秩序な光景と、この琵琶僧とその琵琶の音との間にあるように思われる「深い約束」、巷の「濁波」のような乱雑な音響の底に流れ続く、基調音のような「一道の清泉」のひびきのような琵琶の音、それらはともに、やはりワーズワースの詩句、the still, and music of humanity から暗示を得た、独歩独特の用語「幽音悲調」をかもし出す素材であった。しかし、

この「幽音悲調」なるものは、「要するに符牒にすぎ」ず、独歩の憧憬した世界は人生における「永遠なるもの」と「瞬間なるもの」との対決によって、誘い出された涙の世界であり、「すべての詩は、この哲理を宿し」て、はじめで最高のものとなる筈のものであった。⁽¹⁸⁾つまり、この世界も、「天地生存の感」の痛感される世界であったのだ。

とすると、大津が、無名の一画家、秋山松之助に語った三人の「忘れえぬ人々」はみな、「天地生存の感」を誘発してやまぬ人物群であったことになるのである。それについて、独歩自ら、作中に、次のように書いていた。

「そこで僕は今夜のやうな晩に独り夜更よよひて燈に向つてゐると此生このせいの孤立を感じて堪え難いほどの哀情を催ふして来る。その時僕の自我の角かどがぼきりと折れて了つて、何んだか人懐しくなつて来る。色々の古い事や友の上を考へだす。其時油然そのときゆぜんとして僕の心に浮むで来るのは則ち此等の人々である。我れと他との相違があるか、皆な是れ此生を天の一方地の一角に享けて悠々たる行路を辿り、相携へて無窮の天に帰る者ではないか、といふやうな感が心の底から起つて来て我知らず涙が頬をつたうたことがある。其時は実に我もなければ他もない、ただ誰れも彼れも懐しくつて、忍ばれて来る。」（傍線辻橋）

深夜、孤独の「哀情」が、過去の事柄、友人への追憶を誘発する。そこに登場する人物群は、局限された時間と特定の場所にその生命を営みつつ、永遠無窮の宇宙に包擁帰一されていく存在だというのである。要するに、「天地存在の感」を実感させる人物が「忘れえぬ人々」だということを、独歩は、自らの感情を分析解剖することで説明しているのがあった。

それでは、「亀屋の主人」が、何故、そのような存在といひ得るのか、以下、独歩の描写しているところを検討してみたい。

冒頭、「亀屋」をとりまく状況が次のように記されている。

「多摩川の二子ふたごの渡をわたつて少しばかり行くと溝口みぞぐちといふ宿場がある。其中程に亀屋といふ旅人宿はたごやがある。恰度ちやうど

三月の初めの頃であつた、此日は大空かき曇り北風強く吹いて、さなきだに淋しい此町が一段と物淋しい陰鬱な寒むさうな光景を呈して居た。昨日降つた雪が未だ残つて居て高低定らぬ茅屋根の南の軒先からは雨滴が風に吹かれて舞うて落ちて居る。草鞋の足痕に溜つた泥水にすら寒むさうな漣が立て居る。日が暮れると間もなく大概の店は戸を閉めて了つた。闇い一筋道が寂然として了つた。旅人宿だけに亀屋の店の障子には燈火が明く射して居たが、(下略)「春先とはいへ、寒い〜曇まじりの風が広い武蔵野を荒れに荒れて終夜、真闇な溝口の上を哮へ狂つた。」ここには、闇に沈んだ、広い武蔵野のなかの、小さな点のような宿場町の風景がある。暗い一筋道を北風が、間を置いて強く吹き通つていく。闇は無限の神秘感を漂わせ、吹き荒れる風は、自然の底知れぬ力で、人びとを戦慄させている。そのなかに、「亀屋」という旅人宿が一軒だけ、仄かに明りを点じて、はかなげに息づいているようだ。「天地生存の感」を痛感させる舞台としては、これより以上の世界はない。そこに登場する人物が「亀屋の主人」なのだ。

この作品の主人公大津が、「亀屋」に入つて来た時の、彼の態度はこうだ。

「主人は客の風采を視て居て未だ何とも言はない」、そして奥で手の鳴るのを聞いて、「六番でお手が鳴るよ」と、「哮へる様な声」で叫ぶ。それから、大津に「旦那、東京から八王子なら道が変で御座いますねエ。」といい、大津を「不審さうに」「今更のやうに睨めて、何か言ひたげな口つきをした。」

よくある宿の番頭のように、腹中、「不審」の情を秘めつつ、表面だけの口上手ではなかつた。しかし、その「不審」が水解するや否や、「早くお湯を持つて来ないか。へエ随分今日はお寒むかつたでしょう、八王子の方はまだ〜寒う御座います。」という。その「主人の言葉」には、「お、あいそ、」(傍点独歩)があつても、「一体の風つきは極めて無愛嬌」なのだ。

「年は六十ばかり、肥満つた体軀の上に綿の多い半纏を着て居るので肩から直に太い頭が出て、幅の広い福々しい

顔の目眦まなびが下がつて居る。それで何処かに気懐きましいところが見えて居る。」

大津は、「正直なお爺おぢさんだな」と直感した。その大津が、足を洗つて、未だ拭ききらぬうちに、主人は、「七番へ御案内申しな！」と怒鳴つたきり、大津へは、何の挨拶もしない。泊り客大津に対する主人の応対の仕方が、無愛想なものであることは、誰でもが認めよう。しかし、それが飾らない正直者のしぐさであることは、大津が直覚している。主人は、言うべきことを言ったあと、無心の境地に生きている態である。「淳朴」な生活者の象徴といつていい人物だ。「天地生存の感」をかもし出す世界に生きている、この「淳朴」な生活者が、「忘れえぬ人々」の一人であることは、当然であつた。

実は、この場面も独歩の体験から生まれたものであつた。これを最初に指摘したのは坂本浩氏であつたが、笹淵友一氏が、さらに詳しく考証しておられる。以下、笹淵説を紹介しつつ、些か自説をまじえておく。

『欺かざる記』によると、独歩は、明治二六年五月四日、千葉を発ち、東金まで歩き同夜、ここに一泊、一人の青年と同宿したようである。そして、同月二八日の夜に「東金市の旅宿」という一文を作つたらしい。(その一枚が、学習研究社版『国木田独歩全集』一〇巻の補遺に草稿無題東金市の旅客Vとして掲載されている。)⁽⁴⁾この記憶が、「わが土曜日の夜」の一節となつたのであろう。

「計らず或る旅館の一室に出遇ひ。不思議にも互に打解けて十年の友のごとく語り合ひたる人の。一夜を限りに西と東に別れて其のまま。互に音さたなくなりしことなど思ひ起したる時は。ひたすら人間の逢別逢はれ遇離ぐわりの怪しき縁と。はかなき命運めいゐんなど恐ろしく感じぬ。」

そしてさらに、明治三三年二月二〇日発行の『万朝報』に発表された、懸賞応募一等入選作「驟雨ゆふだ」も、この邂逅をとりあげている。笹淵氏は、発表は「忘れえぬ人々」が前であつても、事実は「忘れえぬ人々」の方が、「驟雨」を改稿したものであろうと考証しておられる。筆者もこの見解に賛成したい。

さて、大津は、秋山から、未定稿の「忘れえぬ人々」を、読ませてほしいととりあげられても、「真実に駄目ですよ。」(中略)スケッチと同じことで他人にはわからないのだから。」と迷惑そうである。しかし、やがて、「読むよるか、僕が此題で話した方が可きさうだ。」「なるべく詳しく話すよ、面白くないと思つたら、遠慮なく注意して呉れ玉へ。その代り僕も遠慮なく話すよ。なんだか僕の方でも聞いてもらいたい様な心持に成つて来たから妙じやあないか。」(傍線辻橋)というようになる。傍線の部分に読みとれるように、今度は、大津の方が積極的に秋山の忠告を期待するのみならず、胸襟を開き得る人物と認容したごとき言辞を發するのである。そして、前述したように、心に深く象嵌されている「忘れえぬ人々」を、詳細に口述したのであった。それは、しかし、次のような言葉で結ばれた。「僕はどうにかして此題目で僕の思ふ存分に書いて見たいと思ふのである。僕は天下必ず同感の士のあることを信ずる。」(傍線辻橋)

この最後の、大津から秋山への言葉は、先の、秋山を心許し得る人物といった風の言句とは、大きくずれるところがあることを否定できない。大津は、「天下」に「同感の士」を期待しているのであって、秋山への囑望は、ほのめかしていない。そして、その後、二年経過した。事実二人の「交際」は「全く絶」えていた。東北の或地方に住んでいる大津は、かつて、秋山と一夜を共にしたと同じ季節の雨の夜、「忘れえぬ人々」を完成した。その時、「忘れえぬ人々」として書き加えられたのが、「亀屋の主人」であった。大津の心に、秋山の姿が、深く刻印されたかのように思わせつつ、大津の語り尽したところで、そうでない雰囲気をもし出す。そして、結末に近づくにつれて、一層、そうでないらしいという読者の予感をかきたてつつ、終局において、「『秋山』では無かつた。」と結んだ運筆の技巧は、まさに至芸というほかはなからう。

しかし、この秋山が、独歩の原体験に則った人物であり、前述したように、「東金市の旅客」「わが土曜日の夜」「驟雨」と描き続けられた程の人物であるのにもかかわらず、換言すれば、独歩に深い印象を与えた筈の人物のよう

に思われるにもかかわらず、何故「忘れえぬ人々」の一人とはなり得なかつたのであろうか。

(四)

独歩のいう「忘れえぬ人々」の本質は、「淳朴」な生活者であり、「天地生存の感」を誘発する人物でなくてはならなかつた。

この無名の画家秋山松之助は「二十五か六といふ年輩で、丸く肥満で赤ら顔で、眼元に愛嬌があつて、いつもにこ／＼してゐるらしい。」という外見の人物である。

大津との対談中も、にこにこのし続けのようで、大津が、「おやもう十一時過ぎた。」と秋山の旅疲れを心配しての言葉にも「どうせ徹夜でさあ。」と「一向平気」なのである。大津の「忘れえぬ人々」の原稿を手にして、読んでみたいとは言いつつ、「一枚二枚開けて見て所々読むを見て、『スケッチにはスケッチ丈の面白味があるから少し拝見したいねえ。』と言うだけで、そのあと、「まあ一寸借して見玉へ。」と、いとも簡単に大津に取り戻されている。その大津は、「読むよりか、僕が此題で話した方がよささうだ。」「僕は先づ此句の説明をしやうと思ふ。さうすれば自から此文の題意が解るだらうから。しかし君には大概わかつて居ると思ふけれど。」などという。それに対して、秋山は、「そんなことは言はないで、ずん／＼遣り玉へよ。僕は世間の読者の積りで聴て居るから。失敬、横になつて聴くよ」といって、「煙草を啣へて横」になり、「右の手で頭を支へて大津の顔を見ながら眼元に微笑を堪えて居る。」(傍線辻橋)のだった。

要するに、秋山は、一度は、「忘れえぬ人々」の原稿を手にながらも、是が非でも読了したいとの欲求にかられてはいなかつたのである。くわえ煙草で微笑しつつ横になつて秋山の姿は、何よりもそれを証明している。

大津にとっては、真剣切実なテーマの告白であった。それに対して秋山は、大津の問題意識に関心をもっているではなかった。画家秋山の大津へのインタレストの焦点は、「自分の書た原稿を見つめたまゝぢつと耳を傾けて夢心地になつて」いる大津を見て、「心のうちで、大津の今の顔、今の眼元は我が領分だ」と思ったところにあつたのだ。画材としての美的関心にあつたのである。美術、文学、宗教などと話題を共有できる、善意の人ではあるけれども、「淳朴」の人という分類に入る人物ではなかつたのである。その故にこそ、独歩は、大津に長い「忘れえぬ人々」論をぶたせたあと、秋山に、一言も発せしめなかつたのである。驚く人、すなわち「驚異心」の持主である大津、つまり独歩にとって、見る人秋山は、「忘れ得る人」であり、驚かない人であつた。独歩にとって、「天地生存の感」に生きる人は、「驚異心」に生きる人でもあつた。「天地生存の感」と「驚異心」との関係とについて、益田道三氏に適切な説明があるので次に借用させていただく。

「天地生存の感に眼覚めて次に来るのは『驚異心』である。『驚異心』というのは、社会生存を捨て、天地生存に生きる時、宏大無辺悠久な宇宙に相對して、而も宇宙と自然とを背景として、人間が生活しているという事実に対して、畏懼と驚異の深い感慨に打たれることをいうのである。独歩はこの心境を、『欺かざる記』に、繰返し表白しているのは勿論、『牛肉と馬鈴薯』や、『岡本の手帳』に於ても、小説の作意として用いている。」

つまり見る人秋山は「社会生存の感」に生きる存在だと、独歩は考えていたのではなかつたか。画家を「社会生存の感」に生きる人物とみたところには、正岡子規が提唱していた「写生文」批判の要素が、独歩の内部に潜在していたからとみていいのではなからうか。後年の文章だが、独歩に、次のような言説がある。

「要するに余の経験に依ると、實在の人物、實際の事件之れ自身が如何に面白く思はれても、之れを直ちに筆に上すのは眞の詩の道を得るに非ず。必ずこれを心底最も深き処に蔵して其醞酵を待たざる可からず。然からざれば其詳細の事實は忘却し易いから写生文とは縁が益々遠くならんも、人生の眞に触れたる詩を得ることに於て誤は此外にあ

るまじと思ふ。」

ここには、画家の写生に発想の原点をもった「写生文」は、「直ちに筆に上」したものの、「心底」における「醜酔」を待たないものという、独歩の批評がうかがわれる。すなわち、画家の手法たる写生は、現象のみを見ているのであって、背後にあるものを熟視していないというのであろう。現象のみを見る人は、「社会生存の感」に生きる人でありでしかなかった。『天地生存の感』に生きる人は、現象の背後を凝視し、そこに何ものかを発見、驚異する人だということになるのである。ここに、「忘れえぬ人」と「忘れ得る人」とは、別の角度から把握する可能性と方法のあることの示唆を、筆者は見出すのである。

(五)

小野博泰氏は、宗教について次のようにいっている。

「宗教の定義についてはヌミノノーゼ体験であるとか、人間の自然の脅威に対する恐怖であるとか生命の拡充感などさまざまな魅力のある定義をあげることができよう。ここでは、いちおう『偶然への拒否』という見やすい仮定から出発してみたい。」

このように、小野氏は一応、「偶然への拒否」を宗教の定義の仮説としてあげているのである。氏は、人間が「偶然を拒否する理由の一つ」として、「不死性 (immortality) への強いあこがれ」があると述べている。この見解を、独歩のいう「忘れえぬ人」と「忘れ得る人」とに適用してみたいと思う。作中の主人公大津、すなわち独歩にとって、一夜を共にした秋山は、ある期間、彼の記憶にとどまっていたとしても、それはあくまで、独歩にとって偶然というカテゴリーに属する経験中の人物であったのではないかと思う。換言すれば、ユングのいう「共時性」体験といい得

るものを独歩に体認させ得なかつた人物であつたであらうと思う。ユングの共時性の原理とは、無意識の世界における、時間、空間、因果の原理に次ぐ、第四の原理である。「この体験では、時間の差違は消えてしまう。」「できごとが過去のものであれ、未来のものであれ直ちに現在なのである。」この第四の原理に基づく体験を、偶然とは異質の原理との合体験を、瀬戸内の孤島の一人の人物、阿蘇山麓の一牡漢、三津ヶ浜の一琵琶僧、亀屋の主人に、独歩は味わつたのではなかつたのか。即ち、これらの人物との出会いに独歩は、「不死性への強いあこがれ」という、宗教的情緒を満喫し得たのではなかつたか。とすれば、この作品における独歩に「天地生存の感」を実感させた「忘れえぬ人々」の群像は、独歩と共時性体験を共にした人間群像、独歩との出会いが単純な偶然の邂逅ではなかつた人間群像、要するに、独歩自身、意図しなかつたとしても、独歩の、宗教的感情を触発した人間群像であつたということになるのではないかと思う。それであればこそ、そのような感情を触発しなかつたところの、即ち独歩の内部では行きずりの一人に等しかつた人物たることの宣言たる、結末の「『秋山』では無かつた。」の一句が、絶妙の光彩をもつて一篇全体に逆照射を放つという効果をもたらしているのであらうと思う。

小論冒頭において、「忘れえぬ人々」に対する、全独歩文学の「コンデンス」とみた吉田氏の見解、「独歩の人間研究の序章」とみた中島氏の見解とをあげておいた。それらと「忘れえぬ人々」が宗教的感情を形象化したものであつたという私見とを重ね合わせてみる時、全独歩文学は宗教的文学であり、独歩自身もまた、宗教的人間、宗教的文学者であつたという規定におのずから帰結してしまうのを避けることができなくなつてくるのである。

注

(1) 『二家の文 独歩の文(読運命)』『文庫』明三九・五。学習研究社版『国木田独歩全集』一〇巻昭四〇・三。以下、本全集は『全集』とのみ記す。

- (2) 「国木田独歩研究」『日本文学講座』一七卷、新潮社 昭三・五。
- (3) 「国木田独歩」『近代日本文学省究明治文学作家論 上』所収、小学館 昭一八・三。
- (4) 「独歩の小説」『明治大正文学の諸傾向』所収、積文館 昭一〇・八。
- (5) 「国木田独歩」『自然主義の研究、上巻』東京堂 昭三〇・一一。
- (6) 『明治文学全集66 国木田独歩集』解題 筑摩書房 昭四九・八。
- (7) 『全集』九卷 昭四一・六。
- (8) 『全集』六卷 昭三九・九。
- (9) 相馬庸郎氏は『欺かざるの記』が、「天地生存の感と対立するものを徹底的に憎み排撃しつづけているにもかかわらず、達した境地の具体的報告ではなく、それに達し得ぬいらだちとなげきに満ちているのは象徴的だ。」と書いている（『欺かざるの記』前篇研究）『日本自然主義論』所収）、八木書店 昭四五・一。「忘れえぬ人々」の書かれた明治三一年には、その他「今の武蔵野」（後の「武蔵野」）「河霧」などが書かれてい、「天地生存の感」が、それら同年代作品全体をおおっている感が深い。
- (10) 『欺かざるの記』明治二六年七月二八日の項。『全集』六卷 昭三九・九。
- (11) 『欺かざるの記』明治二六年七月二七日の項。『全集』六卷 昭三九・九。
- この「淳朴の生涯」は、ワーズワース、バーンズから学びとったものであるらしい。一例をあげておく。
- 「ウオーズウオースの厳正淳朴の生活を語らう、」（『欺かざるの記』明二六年七月一八日の項。）「午前バーンズを読む、『淳朴の生活』の詩的真理に付て愈々思ふ者あり。」（『欺かざるの記』明二六年八月三〇）日の項）。
- このことについては、益田道三「国木田独歩と英文学」（『比較文学的散歩』所収、研究社 昭三一・七）に負うところが多い。

- (12) 『全集』九卷 昭四一・六。
- (13) 『国木田独歩集 近代日本大系10』 角川書店 昭四五・六。
- (14) 『全集』七卷 昭四〇・六。
- (15) 塩田良平「独歩に及ぼしたワーズワースの影響」『明治文学論考』所収、桜楓社 昭四五・一一。
- (16) 「第六章 浪漫主義時代」『国木田独歩—人と作品』有精堂 昭四四・六。この書物の初版は、三省堂刊(昭一七・一一)これは未見。
- (17) 「第九章 国木田独歩」『文学界とその時代 下』明治書院 昭三五・三。
- (18) 「四日朝天氣に勇氣生じ、東金町まで歩行す、其夜東金に宿す。」(『欺かざるの記』明治二六年五月の項。『全集』六卷 月三九・九。
- (19) 「夜は先日作りかけの『東金市の旅客を作る、夜、既に深し。』」(『欺かざるの記』明治二六年五月二八日の項。『全集』六卷 昭三九・九。
- (20) 『家庭雜誌』民友社 明二七・一〇。『全集』一卷。
- (21) 「国木田独歩と英文学」『比較文学的散歩』所収、研究社 昭三一・七。
- (22) 「予が作品と事実」『文章世界』明四〇・九『全集』一卷。
- (23) 「現代人と宗教」『現代のエスプリ現代人と宗教』至文堂 昭五二・三。
- (24) (23)に同じ。

(本論中の独歩原文は、すべて、学習研究社版『国木田独歩全集』によった。)